

## 石河英夫先生の35年

早見 弘

石河英夫先生は、明治43（1910）年5月小樽市稲穂町に生まれた。生家は鳥取県出身で、履物卸売商を営み、現在も御兄弟が駅前通りに店舗を構えておられる。先生の生年は、ちょうど第五高等商業としての小樽高商が、その設立決定をみた年にあたる。北辺の商都小樽に、実業界の指導的人材を育成する目的をもつ小樽高等商業学校とともに生まれた先生は、在職35年、緑丘生活38年の長きにわたり、戦前戦後を通ずる数少ない緑丘人として、その歩みを始められた。

小樽市稲穂小学校、道立小樽商業学校をへて、昭和4（1929）年4月、小樽高商に入学。世界的不況のさなかにあっても、当時の校長、伴房次郎先生のもとで、高等商業でありながらも、脱高商的ムードで過ぎた3ヵ年であった。昭和5年の暮に、かつて「新講堂」と呼ばれた620番棟が新築され、先生三年生の昭和6年には、ゼミナール制度が設けられ、経営・会計専攻の糸魚川祐三郎教授の初めてのゼミナリステンとして参加した。昭和7年高商卒業とともに東京商科大学学部へ進学され、高瀬荘太郎博士のもとで会計学を勉められた。東京商大時代印象に深かった講義は、井藤半弥教授の「財政学」であったという。井藤半弥先生はその頃財政学に目的論的方法論を導入され、社会価値説の体系化に腐心されていた時であり、その苦心が学生にも伝わったのであろう。井藤半弥教授による感銘は、のちに先生が「工業経済学」を担当されたとき、マックス・ウェーバーへの接近に生かされていた。一橋時代に一年間だけであったが剣道を習われたのが、石河先生唯一のスポーツ歴となったようである。

東京での三年間の遊学中も、日本の世相は決して平穏なものではなかった。昭和7年5月15日、いわゆる5・15事件にはじまり、海外では上海事変、

国内では金融恐慌にみまわれて、「大学は出たけれど」就職の機会は決して多くはなかった。そうしたなかでも、昭和10年3月卒業とともに、鐘ヶ淵紡績株式会社に入社、大阪淀川工場に勤務することができた。紡績界の名門といわれた会社ではあったが、月給30円、当時の大学卒の平均初任給50円に比べるとひどく低かった。多数の女工の給与や労働条件にいたっては、細井和喜蔵氏が述べた『女工哀史』の実状そのままであった。他方では、会社は株主に二割五分の高率配当を行なっており、石河青年の正義感はいよいよまで刺激された。一年ほど勤めてのち、自ら断絶を宣告するかのようには鐘紡を退社、一時東京に止まったがやがて郷里小樽へもどり、家業に従事することになった。そのころ、いち早く外国にチェーンストアなる経営組織があることを知り、業容の拡大に手助けされたという。

昭和13年のある日、恩師糸魚川祐三郎先生の来訪をうけ、母校小樽高商の教官にならぬかと勧誘された。その頃、教師としてまた研究者として学界に入ることは、先生の志すところではなかったが、再三の懇諭もだしがたく、同年11月嘱託として就任、「商工経営」担当の教師として第一歩を踏み出された。28歳の時である。

明けて14年1月、室蘭市在住の医師令嬢、小幡起美さんと結婚された。石河夫人起美さんは、筆者の学生時代から、かつて「ミス室蘭」であったという伝説があった。それはたしかに、多感な高商生をすぐにも信じ込ませるほどの、根拠ある美貌にもとづいていたのであるが、実際のところはそうではない。戦前の昭和でも、現在でいう「ミス・コンテスト」はあった。だが殆どこの種のコンテストは、紅灯の女給さんたちの誌上品評会であって、今でいうそれとは大きな違いがある。とはいえ、「ミス室蘭」の根拠もあながち皆無というわけでもない。なぜなら、土地のあるジャーナリズムの発行による、『令嬢名鑑』には、医師の息女として小幡起美さんの記事が掲載されたということだから。

ともあれ、新婚の夢のさなかの14年4月、先生は教授として「本採用」になった。月給は恐らく鐘紡のそれよりも高かったと思われる。しかしながら

戦争の拡大とともに、先生の研究環境は決して恵まれてはいなかった。とくに太平洋戦争に入ってから、就学年数の短縮によって戦場へ向った学生、勤労働員という名前で農村や飛行場建設、軍需工場へ働きに出た学生など、学校に席を温める時間が少なくなっていった。教官もまた監督という仕事で学生とともに出動することになる。19年6月、札幌郊外で飛行場建設のため動員中、石河先生にも召集令状がきた。帯広市に駐在の高射砲第26連隊に入隊、34歳の石河一等兵は、高射砲一門の操作班として汗をしばられた。兵舎ではかつての教え子の青年将校から、慰さめられたり休息の時を世話されたりしたこともあったというが、幸いにして3ヵ月で召集を解除され、学生の少なくなった小樽にもどることができた。とはいえ、再び勤労働員で学生とともに群馬県大田市郊外の中島飛行機工場に出向かなければならなかった。この年、「商業」という言葉が戦時下ではふさわしくないという理由で、小樽高等商業学校は、小樽経済専門学校に改称させられた。

明けて20年2月には、現在旧短大校舎の下隣りにある官舎に一家とともに移転。学校の近くに居住するため、空襲警報のたびごとに、校長室の金庫に納められていた天皇・皇后両陛下の御写真を奉持して、防空壕に避難する役目を果たされた。

20年8月、敗戦による戦前・戦中の価値序列の崩壊は、小樽経済専門学校にも校長排斥事件となって現われた。苫米地英俊校長の辞任にともない、浜林生之助教授の校長事務取扱い、21年5月復員間もない大野純一教授の校長任命、24年5月小樽商科大学の設置と続く戦後の数年間は、インフレと食糧事情の悪化のなかで新しい教育体制への脱皮の時代であった。この過程で石河先生はまず教務部付き教官として、学内行政に参画を求められ、大学昇格の準備のためにも大野先生を助けて奔走されることになった。24年7月7日商大開学式のために、折から函館市に来訪中の恩師、文部大臣高瀬荘太郎氏を迎えに出むかれたりした。

大学になってからの担当科目は「商業簿記」と「工業経済学」であった。私が講義をうけたのもこの二科目であったが、中学卒の一年生が借方・貸方

の仕訳けから始まって、財務諸表の作成にいたるまで、ついになじみにくい感覚ですぎてしまった。ただ高声とガリ版刷りのテキストで講義されたことだけを覚えている。試験成績は「可」であった。四年生になって聞いた「工業経済学」では、雇用と失業、技術進歩の経済学が中心であったように思うが、このときには実のところあまり出席しなかった。試験ではジョン・ロビンソンの「技術進歩の分類」をややハッタリ的に書いて、「優」をもらったことを記憶している。

講義する側の石河先生にとっては、最初の担当科目「商工経営」くらい、関心はむしろ「工業経済学」にあったように思われる。「航空機工業と中小企業」(昭和19年9月)、「日本に於ける工業化過程の反省」(21年6月)、「技術的進歩と失業に関する一考察」(23年11月)、「技術進歩と国民所得」(25年3月)、「生産力の進歩と失業」(26年1月)、「技術的進歩の本質と作用」(27年6月)、この一連の論文のなかで、代替の弾力性と所得分配の関係、工業化過程におけるホフマン法則の発見など、現在、経済成長理論、生産関数論などで中心となっている分析方法を詳細に追求しておられる。もし石河先生に時を与え、近代経済理論と数学の習熟に心がけたならば、本学の「工業経済学」は授業科目中の「目玉商品」となっていたに相違ない。

他方「商業簿記」の担当ならびに木村重義教授の転出後担当された「会计学」、「監査論」についても、著者「商業簿記要論」(昭和27年6月、お茶の水書房)、「 Peyton教授の企業評価論」(28年9月)、「企業利益の測定について」(30年6月)、「企業会計における財政状態の概念」(36年8月)、「引当金の本質と設定条件」(40年12月)など、これまた着実な研究を重ねておられる。昭和31年10月より39年9月にいたる8年の間、学生部長の激職を兼ねられたうえでの講義と研究であるから、一作ごとのご苦勞は察して余りあるのがあろう。

8年間の学生部長から開放されたとき、石河先生はもう54歳になっていた。黒々としていた頭髪もいつしかめっきり白髪がふえてきた。大きな声で話されるのは変わりはないが、教授会での発言も少なくなった。42年に

は、多年の苦勞をねぎらうかのように、1月にはアメリカ統治下の琉球大学へ1ヵ月の会計学講義に招かれ、また9月からは3ヵ月にわたり、文部省海外出張によってアメリカ、ヨーロッパ各国へ旅行された。帰国されてからも大学行政はしばしば石河先生の出馬を要請しなければならぬ機会があった。短期大学の主事、そしてあの44年4月から8ヵ月にわたった大学紛争ではその終幕の「大衆団交」に大学側委員の一人として学生と対峙しなければならなかった。

それから5年たった昭和49年2月19日、定年退職の日を1ヵ月後にして、石河先生は新築校舎210番教室に最終講義のため登壇した。大教室を埋めた学生を前に会計学発展の契機となった歴史的事件の経過を語りながら、会計実務を理論対象とする学問の性格を説いて行った。終末を結ぶにあたり、先生はマックス・ウェーバー『職業としての学問』の一節を引用され、「学問の場合では、自分の仕事が10年たち20年たちまた50年たつうちには、やがて時代遅れになるということは誰もが知っている。……学問上の達成は常に新しい「問題意識」を意味する。それは他によって「打ち破られ」時代遅れとなることをむしろ自ら欲するのである。」(岩波文庫版、31頁)と結ばれた。この緑丘から、石河会計学を時代遅れとする後進の現われることを期待して満場の拍手を背に、35年の長きにわたる教壇を降りていかれた。実方学長の送別の言葉に、石河先生の多年の苦勞をねぎらったほか、学内行政への参画を述べた一節があったが、高商・経専・商大を通じて、緑丘学園の転機となった制度改革の一つ一つに、石河先生の息がかからぬものは一つもないといえるであろう。しかしなぜか先生はそれについて多くを語らない。それは最終講義の少し前、厳冬の吹雪のなかで忽然と消えて行った旧校舎とともに、時代の役割を終えてしまったのだ、というように。

(昭和49年2月21日)